

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 齋藤 公太

本論文は、従来の国家神道論における扱いが一定ではなかったイデオロギー的側面に適切にアプローチするために、「日本神学」という概念枠組みを設定し、北畠親房の『神皇正統記』（以下、『正統記』）の近世から近代における受容史を丁寧に辿った意欲的な論考である。本論文における「日本神学」とは、「日本国家、あるいは日本人の本来性を規定し、その回復を主張する言説」と定義される。具体的には、天皇の統治の無窮性を核として、三種神器の継承や祭政一致、日本固有の規範としての「神道」といった諸概念が関わる言説である。

構成としては、広範な先行研究を踏まえて問題設定を行う序論に始まり、八章の本論部を経て、結論において全体の議論のまとめを行っている。本論部ではまず第一章で、その後の多様な解釈を可能にした『正統記』の不安定な言説構造を明らかにしている。第二章では、近世前中期の受容史として宗教史的背景を踏まえて歴史書と神道書の両面から読まれたことについて、林羅山、山鹿素行、新井白石の『正統記』受容を取り上げて検討している。第三章では閨斎学派における『正統記』受容と深く関わる南朝正統論をめぐる、儒学派における朱子学的正統論と垂加神道の神器正統論との間の葛藤を対象化している。第四章では閨斎学派の若林強斎を特に取り上げ、朱子学者として出発しながら神道教説に傾倒していった彼の祭政一致論を論じる。第五章では、前期水戸学における神器正統論をめぐる栗山潜鋒と三宅観瀾の論争を取り上げ、それぞれの論点を丁寧に整理している。

第六章は、17・18世紀の転換期に、正統言説を普遍的理法ではなく歴史的形成過程に基づいて理解するような歴史主義的な思想潮流が興隆してきたという、知の布置の大きな転換を捉えようとしている。そのために、前半で垂加派の『古事記』研究を論じ、後半では徂徠学派の神道批判以降の「神道」概念の再構築を論じている。

第七章では後期水戸学における『正統記』受容を考察している。幕藩制国家の危機を受けて日本の本来性を「国体」として強調する言説が前景化し、国学への批判を通して、新たな形で『正統記』が「日本神学」の典拠として受容されたことを明らかにしている。第八章では、近代における『正統記』の受容史を扱っている。考証派国学者たちが平明な文章で「国体」と歴史を論じたテキストとして『正統記』を国文教育に採用していく過程を追い、後半ではそうした動向との関連で、井上毅が憲法や教育勅語起草に際して『正統記』の国体論をどのように受容したかを論じている。

本論文の中心概念である「日本神学」について、戦後の神道学史の展開などが十分踏まえられておらず、「宗教」との関係についての記述にぶれがあるなど、今後精緻化すべき課題も多く残されてはいるものの、近世から近代までを射程に入れて、各論点をめぐる先行研究をしっかりと踏まえつつ、全体に一つの筋道を与えるような構想力を備えた論文に仕上がっており、従来の研究にはないたいへん独創的な研究として評価することができる。

よって、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に十分に値するものとの結論に達した。